学生の読書と表現力

―そのコミュニケーション活動への批判と期待―

北村日出夫

1、コミュニケーションの四つの「相」とその《移行現象》

私は、コミュニケーションに次のような四つの側面（あるいは「相」）があると考えている。

①道具性、②コード性、③行為性、④関係性

「道具性」とは、合目的的なコミュニケーションの「相」で、意志の伝達、意見の表明など、コミュニケーションの道具的な働らきを指す。

「コード性」は、記号の仕組みや相互関係を習得したり、文化伝承などにかかわるコミュニケーションの「相」で、狭い意味の教育や、言語の習得などのコミュニケーションである。

「行為性」は、コミュニケーションすること自体が目的となるもので、芸術における表現活動や娯楽的なコミュニケーションの「相」であって、社会学でいう「完結的コミュニケーション」も、このなに含まれる。

「関係性」とは、人間関係を維持するコミュニケーションの働らきを指す。挨拶はその典型例であり、冗談の交換、酒をメディアとするとりとめない雑談などがこれに当る。

実際のコミュニケーションは、これら四つの「相」をともに持つ場合が多い。ただ、いずれか一つの「相」が、そのなかにあって優位性をもっていることで、「道具的コミュニケーション」とか「行為的コミュニケーション」と名づけることができる。

たとえば、広告は、本来「道具性」のコミュニケーションである。消費行動を促すことを目的としているからだ。しかし、広告に使われているコトバが流行語になって、それが仲間との会話に使われると「関係性」の方が優位になり、幼児がテレビCMからコトバを憶えると「コード性」があるとみることができる。テレビCMが

番組より面白いと受けとるなら、「行為性」の働らきをしていることになる。

ゼミの教室でのコミュニケーションも、この四つの「相」の交錯がみられる。しかし、学生が発表したり、そのことをもとに議論をするという場面では、それは「道具的コミュニケーション」であることが必要である。

ところで、私の感想では、現代学生の多くに、「相」の《移行現象》がみられる。とくに「道具性」から「行為性」もしくは「関係性」への《移行現象》が顕著である。

端的にいえば、学生の多くは、議論をするのが苦手であり、自分の意見を、発言したり文章にすることが下手である。そのかわりに彼らはこうした「道具性」のコミュニケーションを「行為性」や「関係性」に切り換えてしまう。発話にしろ、文章にしろ、遊びの領域にひき込んでしまうことには長けている。しかし、論理的に相手を納得させることから逃避しようとする傾向がみられる。

2、「行為性」「関係性」への《移行現象》の原因

このように、現代学生は「道具的コミュニケーション」が苦手であったり、コミュニケーションの「相」を《移行》させるのはなぜだろう。必らずしも、充分に解明できない点もあるが、ここではとりあえず二つの原因を指摘しておこう。

第一に、受験勉強とそれに連らなる教育体制をあげることができる。

簡単にいえば、受験勉強は、教科書に書いてあることを「絶対」のものとして憶えなければならない。いちいち疑問をもつことが許されない。疑問をもって、そこにこだわっていると教育の進度に遅れてしまう。しかも、できるだけ課題（問題）に早く反応することが求められるから、とにかく頭につめ込んでおく必要がある。疑問をもてば、それだけ反応も遅れてしまう。

こうした状況が、学生になるまで、三年とか六年、場合によってはそれ以上続いてきたのである。たしかに「知識」として、数多くのことを憶えることは教育の過程で大事なことである。しかし、一つ一つの「知識」をもとにしながら、「なぜなのか?」と考えることは、これまた教育の過程で重要なことである。ところが受験勉強ではその余裕はほとんど許されない。したがって、まず、教科書に書かれていることを、疑問なく受け入れることが先決問題であるとともに、受験勉強では最終目標になる。

このような環境では、自分の考えを展開したり、表明したりする機会がきわめて少くなる。「答え」は唯一なのであって、他の考え方では別の「答え」が存在することなど許されない。

したがって、「道具的コミュニケーション」として、自分の考えを論理的に押し進め、相手に訴えかけていくという訓練が行われないのは当然であって、大学生になっても、議論が苦手であり、論理的な発想や文章が下手なのは、その延長線上にいまだいるのだと考えられる。

第二はテレビ環境である。テレビの日常化の過程のなかで育ってきた彼らは、遊びとしてのテレビを利用することは秀れている。映像のリテラシーは発達しており、マンガ雑誌の読み方のうまさもこ

れと関連している。

だが、テレビはあくまでも受動的であり、ここでの遊びも、「遊ばせてもらう」ことであり、他人の遊んでいるのを見て楽しむという性格のものである。

これは、「枠のなか」の遊びである。プラモデルやテレビ・ゲームも、この「枠のなか」の遊びにすぎない。マネをすることは上手なのだが、自分で遊びを創出することは下手である。いろいろなメディアを利用することはうまいが、自分なりのメディアを開発することはほとんどない。

だから、限られた範囲での人付き合いはよいし、マネ事的な遊びに興じることに少しも抵抗を示さない。

3、読書の「義務」化と遊びの「表現」

この二つの要素が複合されているのが現代の学生のコミュニケーション活動の姿のように思われる。

読書においては、学生の多くは軽い読物がその中心であって、少し硬いものになると「読まされている」ことになる。私の経験する外国書講読の授業では、外国語を日本語に言い換えることだけで精一杯で、外国書を題材に議論をするということは、ほとんど不可能である。日本語で書かれている本を使って輪読会をしても、対象となる本は、彼らの多くにとっては「教科書」であり、同時に外国書と同じようなものであって、書かれていることをそのまま受け入れることで終ってしまって、議論の対象にすることがなかなか困難である。とくに、一・二回生では、輪読会の本を、「教科書」と呼ぶことが多いのに驚かされることがしばしばである。議論をするためには、自分自身の目を持って、疑問を感じ、自分とのズレを見出し、批判することがなければならない。今日の「教科書」は自分自身の目を持つことを禁じている。だから、書かれていることの受容だけに集中するため、輪読会でも議論が起らないのである。

学生たちのマンガやテレビへの接触度は高いが、これが議論の対象となることはほとんどない。本は絶対なもの、マンガ、テレビは楽しむもの、といった受け取り方から、なかなか抜け出せない。

しかも、学生には、誰もが読んでいるものという「共通基盤」がかつてはあったような気がする。流行ということであっても、わりに硬い本の流行があった。たとえば吉本隆明とか大江健三郎が私のまわりの学生の間で共通に読まれている時もあった。しかし、今、彼らの「共通基盤」はこうした本ではなく、マンガやテレビ番組である。

活字時代からテレビ時代への推移がここに見られ、読書は学生にとっては「義務」となってしまっている感さえする。

同様に、文章では、遊びふうの文章はなかなかうまいが、論理的に自分の考えを書くとなると、とたんに稚拙になる。だいいち、この種の文章を自ら進んで書こうとしない。学生が出すミニコミふうの文集は多いのだが、多くは書くことを遊びにしたもので、真正面から議論をしているのにお見にかかることがほとんどない。

「ポパイ」とか「Lマガジン」のような情報誌、「ダ・カーポ」のような手軽な雑誌などは、いかにも《テレビ的》であって、これらを好んで学生が読んでいることが、今日の学生の表現するものと見

事に通じ合っている。

4、現代社会のコミュニケーション状況への挑戦

私は、コミニュケーション状況のなかで、「行為性」や「関係性」が優位になることは《ある意味で》結構なことだと思っている。それだけ人間味があり、コミュニケーションの質的豊かさがあるからである。コミュニケーションに巾ができ、生活にふくらみを作るのも「行為性」や「関係性」である。

コンピュータ社会になると「道具性」のみが純化されて、他の「相」が捨象される。挨拶という関係的コミュニケーションすら、肉声をやめてテープに録音したものを流すといった現象がみられる。これは「関係性」の「道具性」への移行であり、いつの間にか、それに慣らされてしまうという社会現象がある。

こうした現代社会のコミュニケーション状況に抵抗したり、そのことで欠落するものを補うのに、今日では「行為性」や「関係性」が益々重要になってきているとさえいえる。

しかし、現代学生の場合、「行為性」も「関係性」も限られた範囲に留っていて、主体的にそれを拡大し、創造するところまでに至っていない。さらに「道具性」を忌避することで、社会に対する批判精神を喪失し、さまざまなテーマに関して「意見なし」とか「DK（わからない）」というグループが若者のなかで拡大している結果をうみ出している。

活字の世界や「道具的コミュニケーション」以外のところで、表現力は豊かになっている。メディアの利用法も発達している。だが、これらは、前述したように、与えられた「枠のなか」でのことである。

読書にしても「枠のなか」でしか行なわれていない。「義務」としての読書であり、批判ぬきの受容である。

これらは、さきに指摘した受験勉強とテレビ環境の（それだけではないだろうが）影響がみられる。

自分が与えられた「枠のなか」にいることを自覚し、その枠を打ち破り、自らの手で、メディアの諸状況を主体的に読み込み、自らの表現メディアを積極的に開発していくこと、それが、私からみた学生の（そして私自身にとっても）重要課題である。

「道具性」を喪失したり、それから逃れることなく、即自的であるとともに対自的（自己の相対化）に現象を認識することによって、「行為性」「関係性」「コード性」「道具性」をともにより充実させていくことが、学生のコミュニケーション活動に望まれることである。これはまた、今日の社会のコミュニケーション状況への挑戦にもなる、と私は考えている。

若者がもつているエネルギーを「枠のなか」にとじ込めている社会から新らしい文化の創造力はうまれてこない。若者自身がエネルギーを「枠のなか」にとじ込めているという私の認識が、学生のコミュニケーション活動への批判であり、学生が枠を打ち破るエネルギー（文化の創造力）を持ってほしいし、必らず持っているはずだというのが、私の期待である。

（大学文学部教授）

中・高生の読書と表現力

―最近の読書調査を中心に―

明川忠夫

読書は、時代によって、さまざまな変遷がある。われわれは、ともすれば戦前や戦後の活字文化の読書観で、学生の読書を見てしまう危険性を持っている。が、今や情報化・映像化の時代なのである。「見る」「聞く」が異常に発達した中で、彼らの読書観はどんな変化をしたのか。最近の本校の具体例をひきながら、与えられたテーマについて考えてみたい。以下文中の図表は、断ってないかぎり、本校生（中・高とも一学年二クラスずつ）による昨年秋の調査結果である。

最近の学生は本を読まない。全国学校図書館協議会の第二十八回読書調査によれば、中学生の四十二％、高校生の五十六％が、月0冊という恐るべき結果がでている。マンガ、雑誌をのぞいた％である。平均すると読書量は小学生で月五、六冊、中学生一、九冊、高校生一、二冊と高学年になるほど減少してしまう。

なぜ、こんなに読まなくなったのか。一つの資料になるのが図一である。「読むひまがなくなった」とする中・高生が多いのに、まず驚かされる。つづいて「読むのがめんどう」が、高学年になるほど増加する。この原因の大きなものは、一つは受験、一つは趣味の多様化によるものであろう。入試から解放されている本校では、中学生が月二、九冊、高校生が三、一冊読んでいるので、受験による読書量の減少は否定できない。また「ラジオやテレビを受動的に気楽に見る彼らにとって、本を読んで自分を創り出していく能動作業がめんどう」（東海林典子『学校図書館速報版』57・11・15）なのである。

趣味の多様化という点から考えると、中・高生の読む本は、圧倒的に趣味、娯楽、スポーツの本が多い（図二）。かつて、文学が一位にされてきたものだが、文学は二位、三位。二つたしたにしても、趣味などに及ばない。

中・高生、とくに高学年になるほど、趣味はますます多様化する

が、その例を三大マンガ誌（ジャンプ、サンデー、マガジン）をのぞいた雑誌を少しあげてみる。中学生は、ポパイ、ホット・ドッグ、タッチ、ヤング・ジャンプ、ホリデー・オート、ロード・ショウ、アニメージュ……など、高校生は、モータ・サイクリスト、ニュートン、SFアドベンチャー、鉄道ファン、週刊FM、天文ガイド、SAGE、フォーカス、ガン、ジ・アニメ……など、挙げればきりがないほどである。これらは、情報化時代、映像化時代の反映である。「読む」という機能は、かつて大きい役割を果たしてきたが、今は「見る」「聞く」が主流である（図三）。「読む」は、一つの手段にしかすぎないのであろうか。

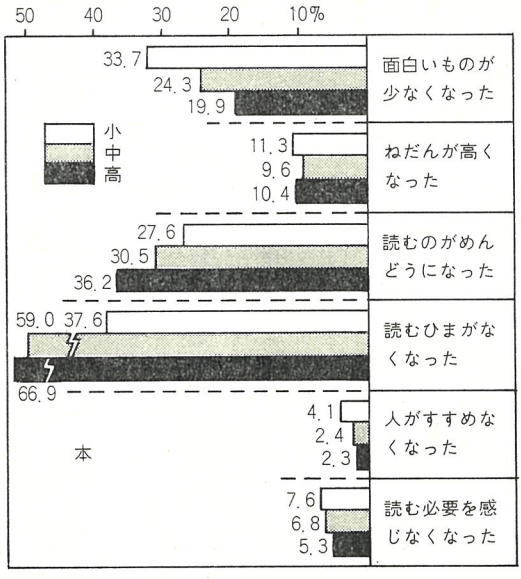

図1　どうして読む量がへったのですか
（全国学校図書館協会の読書調査による）

趣味の多様化は個性の表現という人もあるが、これは没個性といった方がいいようだ。彼らは、複雑化、巨大化したマスコミを一方的に「見る」「聞く」という姿勢で、受け入れざるを得ないからである。主体的でなく、受身的なのである。

したがって、読書の目的も、「教養のため」といったのは二の次である（図四）。「趣味を深め」「気ばらし」に「楽しく」読むことが主流なのである。出版も、その目的に応じて変化している。この事実を知らないで、大人が良書を読ませようとすると、当然、彼ら

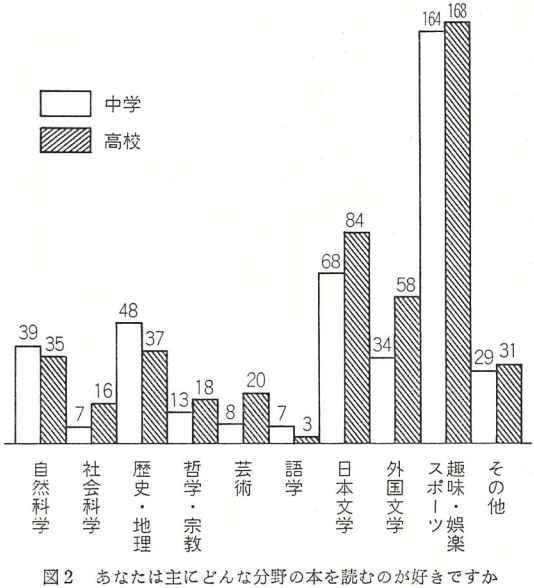

図2　あなたは主にどんな分野の本を読むのが好きですか
（いくつでも）

は「おもしろくない」「おじんくさい」と言う。何が良書か、というのは問題があるとしても、例えば古典は「古くさい」と彼らに映ってしまう。しかし、「教養を高める」「生き方を考える」をプラスすると、かなりのものとなる。高学年になるほど、人生の指針を得るような本を要求しているのは注目される。

この意味では、彼らは割り切って本を読んでいるようだ。彼らに好きな作者と印象に残っている作品を挙げてもらうと、次のようになる。

中学生の好きな作者は、星新一、西村京太郎、赤川次郎、コナンドイル、宮沢賢治、夏目漱石など。高校生では、星新一、筒井康隆、畑正憲、森村誠一、松本清張、アガサ・クリスティーなどである。

これに対し、彼らの印象に残っている作品は、中学生では『ガラスのうさぎ』『オーロラの下で』『悪魔の飽食』『ぼくがぼくである

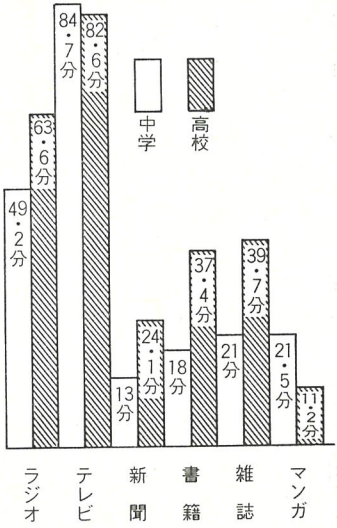

図3　あなたは、ラジオ・テレビ、新聞、書籍、マンガに毎日平均何分ぐらい接していますか

こと』『プロ野球を十倍楽しく見る方法』『窓ぎわのトットちゃん』など。高校生では、『人間失格』『こころ』『罪と罰』『聖書』『伊豆の踊り子』『塩狩峠』などである。

ここで断っておかなければならないのは、作者、作品ともトップで九票前後、下位で三票前後のものである。高学年になるほど、これも多様化される。さらに、感動した作品の多くは、中・高生ともに夏休みの課題図書が多く入っていることである。こうしたことをいちおう頭に入れて、これらの傾向を見ても、ほぼ次のことは言えるようだ。彼らの好きな作家は現代作家の軽いもの、印象に残っている本は、中学生が話題本に弱い一面が見られるとしても、全体には重いもの、つまり「良書」があげられる。彼らにとって、好きな作家と印象に残っている本は別という割り切った選択をしていること

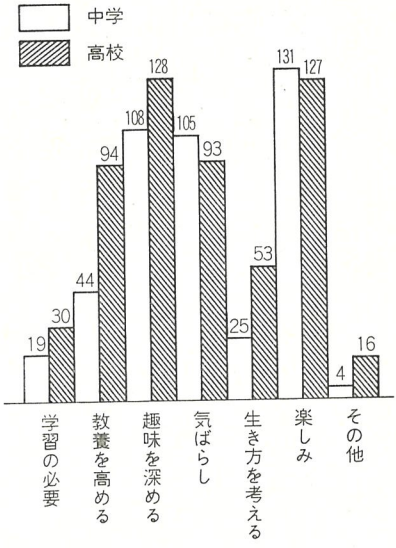

図4　あなたは読書をどんな目的でしていますか（いくつでも）

とになる。われわれは、自信をもって「良書」を推薦していい。

先に、趣味の多様性は、彼らの没個性に通ずると述べたが、「気ばらし」や「楽しみ」に本を読むためか、問題意識には極めて乏しいようだ。この例は、文化祭の展示物に年々顕著に現われている。問題意識のある作品や展示物には人が集まらないので、そうした展示物は、さけるようになってきている。このことが、また文化祭の中味を悪くするという悪循環をきたしている。

問題意識のなさは、読書感想文によく現われている。これは、もちろん、高校生より中学生に多いが、中学生の例を大きく分けると次のようになる。

(ア) あらすじ型　(エ) 解説型
(イ) ほめすぎ型　(オ) その他
(ウ) 脱線型

(ア)は、あらすじを書いて感想を付加したり、あらすじの途中に「……思う」「……感動した」を繰り返すもの、(イ)は、批判がなく、作品べったりのほめすぎのもの、(ウ)は、いつのまにか作品から離れて、難しい、好きかってなことを書くものである。この型には比較的成績の良い者が多い。(エ)は、後ろの解説を参考にしすぎたもの、(オ)は、(ア)～(エ)以外のものである。全体には、残念ながら(ア)が多い。(ウ)は自己主張があるので、指導すると、すばらしいものになる可能性をもっている。

概して言えるのは、受身的な読み取り方が多いことである。本の中に現実的な疑問点を発見し、そこから深く切りこんでくる者は少ない。切り込んでくる者は、四十七名のクラスの中で六名前後というところであろうか。

彼らは、正しく相手に伝えられる、わかりやすい文を書くのも苦手である。中・高の入試に作文がないこと、友人に手紙より電話の現実、マンガ的連想思考などが、その原因であろうか。一例をあげる。

本校の校長が大石先生の家に来て、本校に大石先生は、また岬へもどると生徒と約束したと言って困ったのは、生徒との約束をしたからだけでなく、十二人の生徒と別れたくなくて、完全に生徒を好きになっていると思う。(中二)

『二十四の瞳』の感想文の一部である。主語と述語の対応のないねじれた文である。校長、大石先生、私の主語が混乱している。理由の書き方の対応もまずい。一読して頭が混乱する文体である。

さて、与えられた紙面がつきてしまった。「読む」「書く」という機能は、「見る」「聞く」というマスコミに押し流され、本来の機能は変容している。そして、問題意識のない、非思考型の「良い子?」を創っている。これでは、民主主義の危機である。

しかし、救いはある。彼らが良書は良書、読書は人生の指針と少なからず思っていることである。情報化、映像化時代の中で、改めて読書の意義を再認識するとともに、ラジオ、テレビを利用した新たな読書を考えていかなければ、たいへんなことになるだろう。

(香里中・高教諭)